

## 紹介

榮新江・李肖・孟憲實主編

### 『新獲吐魯番出土文獻』

上下一二冊

高田時雄

今世紀に入って中國の學界ではトルファン研究がにわかに活氣附いている。學術誌『吐魯番學研究』の創刊(二〇〇〇)<sup>①</sup>、吐魯番學國際學術研討會の開催(二〇〇一、二〇〇五、二〇〇八)など、その賑やかさはまことに目を見張るばかりである。これは吐魯番地區文物局局長の李肖氏をはじめとする現地の研究者の熱心な活動にくわえ、自治區政府などの積極的な經費支援がその發展をもたらしたものであるらしい。

國外に存在するトルファン文書目録もまた近年中國學者の手によって相次いで刊行された。陳國燦・劉安志主編『吐魯番文書總目』(日本收藏卷)、榮新江主編『吐魯番文書總目』(歐美收藏卷)がそれで、こ

ういった基礎的な研究環境の整備も中國トルファン學の隆盛に大きく寄與している。

もと大谷探險隊所獲品で、現在旅順博物館に所藏される新疆(トルファン)出土の佛典斷片圖録が、日中の共同研究の成果として出版されたことも近年の注目される出来事であつた。<sup>②</sup>

このようなトルファン學の最近の動向を象徴するような大冊がこの度相次いで刊行された。一は『吐魯番柏孜克里克石窟出土漢文佛教典籍』(文物出版社、二〇〇七年九月刊)で、いま一つはここに紹介する『新獲吐魯番出土文獻』である。ともに中國でいう八開本精裝のフルカラー圖録で、それぞれ「吐魯番學研究叢書甲種本」の一と二として出版されたものである。

いま本書の内容に立ち入る前に、今回の出版の歴史的な意義を明らかにするため、トルファン出土文獻の歴史と特質を簡単に振り返っておく必要があるように思われる。トルファン盆地全體は約一七〇平方キロメートルあり、その此處彼處には高昌や交河などの都市遺構が残されるほか、ベゼクリクなどの石窟寺院の遺跡が散在している。さらに嘗てこの地に生活した人々の墳墓も

數多く点在している。この地域では十九世紀の末以來、各國の調査隊によって遺跡の探索が行われ、考古遺物や壁畫をはじめとする佛教美術が大量に持ち出された。そして廣範圍にわたって点在する遺跡から様々な言語で書かれた大量の文獻が発見された。これは誰しもよく知るところである。文獻は漢文及びウイグル語のものが多數を占めるが、これらの文獻の一部はソグド語やトハラ語といった今日ではすでに滅んだ言語で書かれてあり、その解讀研究を通じて西域の歴史と文化の解明が飛躍的に進んだ。他の地域、例えばカラシャールやクチャ近邊からもトハラ語文獻やサンスクリット寫本が発見されたし、コータン近邊からはコータン語寫本が、ニヤなどからはカローシユティー文字で書かれたインド語文獻が出ているなど、タリム盆地周邊の各地から様々な言語の資料が発見されてはいるが、それらの總量はトルファン出土のものと比較すれば遙かに少ないのである。概してトルファン出土文獻の豊さは比類を見ないと云える。

最初にこの地域に注目したのはロシアである。一八七九年にトルファン盆地を訪れ

たロシアのドイツ人植物學者レーゲル (Johann Albert Regel, 1845-1908) は、高昌故城などの遺跡の圖面を報告中に公表して注目を浴びた。次いで一八九三年から五年にかけて行われたロポロフスキー (В.И.Ропоровский, 1856-1910) の探險隊には、後にカラホトの發見で名を馳せることとなるコズロフ (П.К.Козлов, 1863-1935) も参加していたが、彼らはトルファン<sup>③</sup>の遺跡から漢文、ウイグル、サンスクリットの寫本を持ちかえっている。そこにはソグド語寫本も一點含まれていた。ただこの探險隊の主たる任務は地理學的、氣象學的なものであったために、寫本の獲得は單に偶發的なものに留まらざるを得なかった。しかし一八九八年にクレメンツ (I.A.Kremenu, 1848-1914) がトルファンを訪れたときには、寫本や繪畫、碑銘などを蒐集することもその任務に含まれていた。はたして彼はウイグル寫本をはじめとして數多くの獲得品を持ちかえることに成功し、その成果はオルデンブルグ (С.Ф.Орденбург, 1863-1934) により一八九九年にローマで開催された國際東洋學者會議で報告されたのである。かくしてト

ルファン盆地がシルクロード上の一大文化據點として一躍脚光を浴びることとなり、中央アジア探險の國際組織<sup>⑥</sup>の設立が提案されるに至るのである。ロシアでも同盟のロシア委員會 (comité russe) が作られるが、すぐには大規模な探險隊の派遣には繋がらなかった。

一方、ドイツは一九〇二年から一九二四年までのあいだに、グリユンヴェーデル (Albert Grünwedel, 1858-1935)、ル・コック (Albert von Le Coq, 1860-1930) が率いる探險隊を前後四回にわたってタリム盆地北沿地域に送り出し、目覚ましい成果を挙げた。現在ベルリンに所藏されるトルファン寫本はすべてこれらの數次にわたるドイツ隊のもたらしたものである。それらはウイグル語、漢文、ソグド語のほか、各種の言語による貴重な文獻を含んでいることは周知の通りである。文獻について言えば、ドイツ隊の所獲は少なくとも量的に抜きん出ており、他の追隨を許さない。

日本の大谷探險隊の隊員もまた早くからトルファン盆地で活動した。第一回探險に参加した渡邊哲信と堀賢雄は一九〇三年にトルファン盆地に入り、調査を行った。そ

の前に彼らはキジルでグリユンヴェーデル等の一行と遭遇している。さらに第二回探險の橋瑞超と野村榮三郎は一九〇八年の冬にトルファンで一ヶ月にわたるアスターナなどの發掘を行ったほか、第三回探險でも、一九一二年に吉川小一郎がトルファン各地で發掘を行うなどしてウイグル語や漢文の寫本を獲得している。

一九〇九から一九一〇年にかけて、ロシアはようやくオルデンブルグの率いる本格的な探險隊をこの地域に送り出した。彼らはカラシヤール、トルファン、クチャなどで調査を行った。とりわけトルファンでは交河(ヤールホト)や高昌、センギム、ベゼクリク、ムルトウツク、トヨクなどで精力的に活動したが、先行したドイツ隊によってめぼしいものは持ち去られていたために、寫本などの文獻は豫想したほどには獲得し得なかった。しかしオルデンブルグ隊の所獲寫本斷片は、今日までなお手つかずのまま残されているものが相當量存在するようである。今後の調査が待たれる。ちなみにオルデンブルグはその第二回探險(一九一四—一九一五)において敦煌莫高窟で石窟調査を行い、併せて多數の寫本斷片を入手

したことは有名だが、上海古籍出版社が出版した『俄藏敦煌文獻』中には、トルファンで獲得した文獻がかなり含まれていることに注意する必要がある。

その少し前、のちにフィンランドの大統領となるマンネルハイム (Carl Gustav Mannerheim, 1867-1951) は、一九〇六一九〇八年、ロシアの軍人として東トルキスタンの調査を行っている。當時フィンランドはロシアに属していた。彼はヤールホトや高昌などで、漢文、ウイグル文を主とする寫本を購入した。これらは現在フィン・ウゲール協會 (Société finno-ougrienne) に歸し、ヘルシンキ大學圖書館に寄託されている。

また一九〇九—一一年、一九一三—一四年の二回にわたり、東トルキスタン及び甘肅・青海などでチュルク語方言を調査するために派遣されたマールロフ (C.E. Marouf, 1880-1957) も若干のウイグル語寫本入手した。第一回時に甘肅で獲得したウイグル譯『金光明經』寫本は、一九一三年にラードロフ (B.B. Radloff, 1837-1918) との連名で公刊された。

本格的な探險隊の派遣こそドイツに遅れ

をとったものの、ロシアはしかし早くから外交ルートを通じて寫本の獲得を積極的に進めていた。カシユガルに駐在したペトロフスキー (Н.Ф. Петровский, 1837-1918) のこの側面であつた役割は極めて大きい。同じようにウルムチ領事を務めたクロトコフ (Н.Н. Кротков, 1869-1919) や同じくウルムチの領事官附醫師であつたカハノフスキー (А.И. Кухаровский) は熱心に各種寫本を蒐集し、本國に送り届けていた。現在ペテルブルグに所藏されるトルファン文獻は彼らのもたらしたものが少なくない。

スタイン (Aurel Stein, 1862-1943) もその第三回探險 (一九一三—一九一六) 時にトルファンにやつて來た。彼は三ヶ月以上にわたつて、高昌故城、トユク、ムルトウク、アスターナで調査にあつたが、アスターナでは墓葬の發掘も行つている。

このようにトルファンの遺跡調査と文獻の獲得とは、當初から主としてロシア、ドイツ、日本、イギリスなどの探險隊により行われてきた。その一方、中國はようやく一九二七年にスウェーデンと共同して西北科學考察團を組織、自ら西北地域の總合的

な調査に乗り出した。その隊員である黃文弼 (一八九三—一九六六) 等は一九二八年の春に高昌古城やセンギム、ベゼクリクなどを調査し (第一次調査)、一九三〇年の二月から三月にかけて交河故城、及び附近の墳墓 (溝西、溝北) を調査し、またトルファン南方で古代の道路跡を發見した。さらに高昌故城附近の古墳を調査した。しかし第二次大戦以前にはこの黃文弼の調査のほかにはとりわけて言うべきものはない。

以上が一九世紀末以來の各國のトルファンにおける考古調査及び寫本獲得の経緯である。しかし一九四九年に新中國が成立すると状況は一變し、發掘はすべて中國學者の手によつて進められることとなった。とはいへ様々な條件的制約から、その道程は必ずしも平坦ではあり得なかつた。またすでに外國人の手によつて多くの文物がそれこそ根こそぎ持ち去られた後のトルファンには何等これといった價值あるものが残されているとは思ひにくかつた。しかし戦後今日までの長期間のうちには、やはり多くの貴重な發見が爲されていることはむしろ驚くべきことである。戦後の中國におけるトルファン寫本の發見を時系列に従つて辿

つてみると、大體以下のようになる。

まず一九五七年から一九七五年までの二〇年近くの間に、新疆維吾爾自治區博物館文物考古隊はアスターナ及びカラホージャの墳墓で斷續的に一三回の發掘を行い、大量の文書を獲得した。發掘した墳墓数は四〇〇に近い<sup>⑩</sup>。これらの文書の整理は一九七五年に發議され、翌年には北京に運ばれて本格的な研究が始められた。中心となったのは唐長孺氏で、發掘主體たる新疆博物館のほか國家文物局古文獻研究室及び武漢大學歴史系との共編として、一九八〇年から一九九一年にかけ全一〇冊の録文集が陸續出版されたほか、その後四大冊からなる帶圖本も出版された<sup>⑪</sup>。トルファン各地の遺跡では、表層にあつたものは外國の調査隊がほとんど隈無く調べ盡くしたとはいえ、彼らの手は徹底して地下の墓中にまで及ぶことはなかった。橘瑞超やスタインはアスターナで墳墓を發掘して、文書を獲得しているが、それらはごく一部に過ぎず、墳墓はまだ大多数存在したのである。

發掘はアスターナ等の墳墓を中心として一九七五年以後も繼續され、少なからざる文書が発見されている。それらは性格上、

上記『吐魯番出土文書』を補うべきものがあるが、一九九七年に至り、トルファン現地における發掘責任者であつた柳洪亮氏によつて録文集が公刊された<sup>⑫</sup>。この書物には、墓文書以外にもまた交河故城から出た『孝經』をはじめ、トユク千佛洞やベゼクリク千佛洞から発見された典籍殘卷、文書なども含まれている。

一九八〇年の一〇月から翌一九八一年の七月にかけて、ベゼクリク千佛洞を修理する過程で、洞窟の内外から八〇〇餘點の文獻が発見された。多くは漢文佛典の斷片であつたが、ウイグル文や、ブラーフミー文字、ソグド語、西夏文の文獻も含まれていた。小文の初めに言及した『吐魯番柏孜克里克石窟出土漢文佛教典籍』はこの時の所獲品のうち漢文佛教文獻を公刊したものである。また胡語文獻ではソグド語及びウイグル語で書かれたマニ教文獻が吉田豊、森安孝夫兩氏との協力の下に公刊されていることは、日本學者の國際的な貢獻として特筆される<sup>⑬</sup>。

さてここでようやく本書に収録されるいわゆる「新獲」文獻の話になるわけであるが、これらは上記の新中國における發見の

後を受けて、(例外もあるが)概ね世紀が改まったのちに各地から新たに得られたものである。多くが墳墓から出土したものであることはこの場合も同様であつて、もはや都市遺構や寺院などから得られるものは非常に限られ、必然的に墓葬中から獲得されるものが大多数を占めることになる。これは上に概観したトルファンの考古發掘史からしても當然だが、纏つて言えば、墳墓の發掘はなお多くの可能性を秘めているとも言ひ得るわけである。

さて本書所收文書が発見された時期と地點を、本書の収録順に列舉してみると以下のようになる。文獻が出土した墓葬の數と、それら文獻の總數も附しておこう。

- 一、二〇〇四年阿斯塔那出土文獻 墓葬 4 文獻數 10
- 二、二〇〇六年阿斯塔那出土文獻 墓葬 1 文獻數 4
- 附、一九六五年阿斯塔那出土文獻 墓葬 1 文獻數 2
- 三、二〇〇四年巴達木出土文獻 墓葬 12 文獻數 42
- 四、二〇〇四年木納爾出土文獻 墓葬 1 文獻數 11

五、一九九七年洋海出土文献 墓葬1

文献数16

六、二〇〇六年洋海出土文献 墓葬1

文献数48

七、二〇〇二年交河故城出土文献 文献

数50

八、二〇〇五年臺藏塔出土文献 文献数

15

九、二〇〇六年徵集吐魯番出土文献 文

献数68

附、二〇〇六年徵集和田地區出土文献

文献数3

十、二〇〇一年鄯善縣徵集文献 文献数

23

かつて公刊された文書の大部分がアスターナ出土であったのと比較すれば、「新獲」文献は「巴達木」「木納爾」「洋海」といった耳新しい墳墓から出ていることが注意される。しかし本書には地圖が附載されていないために、これらの墳墓がトルファン盆地のどの地點に當たるのが、少なくとも本書だけでは知り得ないのは非常に不便である。筆者は編者の一人である榮新江氏が別途發表した一文附載の地圖によってこれらの墳墓の位置を知ることが出来

た。<sup>15</sup> それに據れば、「巴達木」墓地は高昌故城の東北方、アスターナよりさらに火焰山に近い場所にあり、「洋海」は同じく高昌故城から東南東へ直線距離で一〇キロほどの地點にある。また「木納爾」はずっと西方、現在の吐魯番市の東數キロの地點である。もちろんこれらの墳墓については發掘の簡報がすでに出ているものがあり、それに就いて位置を確認することも不可能ではない。<sup>16</sup>

墓葬以外では、交河故城から出土したものがあ。これらは強い風によつて表層の土砂が吹き飛ばされ、下層にあつた文献が自然に姿を現したものだというのが、自然の凄まじい力に驚嘆するとともに、なおこういう可能性があることには興味をそそられる。しかしこういつた事例はそうしばしば起こり得るものではなからうし、大量の發見に結びつく可能性は低い。他には臺藏塔から唐代永淳年間の暦日などが發見されている。この臺藏塔というのは高昌故城の西北一二キロほどの位置にあり、アスターナ墓群からそう遠くない所である。ウイグルの少年がその東壁の上方にある穴から發見したものといい、これも嘗ての調査隊に

よる持ち去りを免れたものである。臺藏塔はグリユンヴェーデルが「Taisan」と呼んでいる遺跡に相當する。<sup>17</sup> この塔は一九〇三年に大谷隊の渡邊哲信と堀賢雄も訪れ、次のような記録を残している。「タイジャン・トラは堀氏の步測にて、頂の一方三十四歩、その北東の壁は稍々完全なるも、西は零落甚しく、南壁は崩壞して、此の所より登るを得（トラは其の中部は空洞なりしが如し）而して、其の東壁の頂部に、六箇の立像安置壁龕あり。其の次下に七箇、次下に八箇、次下に九箇と層々に壁龕ありし如し。その高さは石を投下して算するに約七十呎あるべし。」

その他、本書には今世紀に入つて以降、折に觸れて民間から徵集された文献も相當數收録されている。これらは正確な出土地の情報に脱落しているのが難點であるが、しかし紀年を有するものや、官印の鈐されたものもあり、他の文書と併用することで重要な史料となるものも少なくない。コータンから出たものは兔も角、二〇〇六年の吐魯番徵集、二〇〇一年の鄯善縣徵集文献は、その形状から言つて、これらもまた墓葬から出土したものに違いない。これら墳

墓の副葬品がつねに盜掘の被害に直面していることは容易に想像し得るが、このように公の有に歸するものの割合は果たしてどの程度のものであろう。

いづれにせよ本書に収録された文獻は、墓葬から出土したものが多數を占めていることは間違いない。一般に新中國成立以降發見された吐魯番文獻は、大きく二種類に區別できる。一はアスターナなどの墓葬から出土したもの、もう一はベゼクリクなど石窟寺院の遺址から出たものである。そして數の上から言えば、前者のほうがずっと多いことは言うまでもなく、本書の場合も例外ではない。何度も觸れているように、遺跡の表層に存在したものは早い時期に外國の探險隊により根こそぎ持ち去られてしまったからである。こと文獻の獲得に關して言えば、戦後の中國の探索が地下に向かわざるを得なかったのはこういう條件によるのである。

中世ベルシャ語、モンゴル文、チベット文など極めて多彩であり、發見された文獻の年代についても非常に長期に渡っている。内容の點では、マニ教など他の宗教のものもあるとはいへ、佛教典籍が大多數を占める。一方、墓葬から出土する文獻は基本的に漢文文獻であり、時代も高昌國から中唐までにほぼ限られる。これがトルファン盆地の歴史的變遷を如實に反映するものであることはいうまでもない。トルファン盆地には漢代に車師前國が存在したが、武帝の頃、この地の統治權をめぐって匈奴と漢とのあいだに繰り返し戦争が行われ、やがて漢の勝利に終わる。次いで元帝の時代に戊己校尉や高昌壁が設置され、中原王朝の植民地としての態勢が整い始める。その後五涼政權の治下に入り、また闕、張、馬、麴氏といった漢人の獨立政權たる高昌國の時代を経て、唐の貞觀十四年（六四〇）ふたたび中原の支配下に歸し、西州と呼ばれることとなるが、唐の支配は九世紀のはじめを境としてこの地に及ばなくなる。代わってトルファン盆地の主人となるのはウイグル人であり、この地で支配權を確立していた彼らは、やがて八四〇年に漠北のウイグ

ル可汗國が瓦解すると彼らのうち西遷してきた勢力がこの地にウイグル國を樹立した。彼らはやがて佛教に歸依し、明初に至るまで長期に渡って佛教ウイグル王國の命脈を保持し續けるのである。したがって遺跡の表層で發見された文獻は基本的にウイグル國以後のものであり、墓葬から出土する文獻は高昌國時代から唐の西州時期まで、時代的にも非常に明確な區別が可能となる。トルファン文獻の研究もこれら二種類の別に応じて、大いに異なる内容とならざるを得ない。第二次大戦前のトルファン寫本研究の重點はいわゆる胡語文獻をめぐって展開され、その主たる擔い手は歐米や日本の學者であつた。一方、アスターナ墓群などから出土した文書のコア部分は、大抵副葬品の紙衣、紙鞋、人俑などの材料に再利用されて残つた漢文の官文書である。これらの官文書の研究は、従来もフランスのマスベロがスタイン第三回探險所獲の文書を用い、また日本の學者たちが大谷隊の資料を用いて研究を行つていたが、前世紀の八十年代以降『吐魯番出土文書』の出版などによって、格段に資料が増加し、中國學者による研究も著しく精細度を加えるようにな

つてきた。今回の「新獲」文獻の公刊は、こうした過去の中國學界の蓄積を承けたもので、更に大きな一歩を進めたものと言える。

上に觸れた二種類の吐魯番文獻は時代相も異なり、關連する事象にも大きな隔たりがあることから、筆者は二つのトルファン學を設定して差し支えないのではないかと考えている。今回の墓葬から出た「新獲」文書は、當然ながら古い時代のものであり、文書に反映される内容もまた基本的に漢文化の傳統的な世界である。文書以外の文獻として擧げられるものが、詩經、急就篇、千字文、論語、孝經儀、占書の類であつて、これら墓文書には佛教の影がほとんど現れないのを特色とする。龍朔二年(六六二)の僧籍(巴達木一一三號出土)<sup>⑭</sup>や、神龍三年(七〇七)の西州高昌縣開覺等寺手實(阿斯塔那六〇七號出土)など多少とも佛教に關係せぬでもない文書は存在するが、一義的に佛教文獻といえるものは見られない。これは本書に併收される交河故城の出土文獻が一例を除きすべて佛典であるのと著しい對比を爲している。

しかしトルファンは西陲の要衝に位置し、

シルクロードの民族との交渉もまた日常的に不可避であつた。「新獲」文書には問々民族問題の解明に資すべき材料が見られる。巴達木一〇七號墓からは唐の龍朔三年、金滿都督府から西州都督府に宛てたソグド語の書簡が出た。本書には吉田豊氏による轉寫と譯文が収められているが、このソグド語書簡は別の(多數の斷片からなる)漢文文書「唐龍朔二、三年西州都督府案卷」(二〇〇六年徵集吐魯番出土文書の三五)

とともに、榮新江氏の論文「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」<sup>⑮</sup>で利用された。このソグド文書簡が出た墓葬には「白願伯」という人名を書いた土製の墓誌が出ているので、この人物の墓と分かるが、果たしてこの百姓の人物の族種は何であつただろうか。普通には白(帛)姓は龜茲の王族の姓とされるが、ならば龜茲人がソグド語を用いていた(或いは理解した)證據となるであろうか。<sup>⑯</sup>

また闕氏高昌國の永康九、十年(四七四、四七五)の「送使出人、出馬條記文書」(洋海一號墓出土)には南朝劉宋の使者「吳客」のほか、子合國(カルガリク、玄奘の斫句迦國)、婆羅門(インド)、烏菴

國(北インドのウッディヤーナ、玄奘の烏仗那國)の使者を送った記事が見えていて、高昌國が東西交通上の重要な地點であつたことを物語っている。<sup>⑰</sup>

「新獲」文書はこのような國際關係及び民族問題に關する材料を提供するばかりではない。開元二十五年(七三七)の「禮部式」(交河故城出土)と覺しいものが見えるほか、調露二年(六八〇)の「東都尚書省吏部符」(巴達木二〇七號墓)などが發見されていて、制度史研究に重要な貢獻を果たすことは疑いない。一々取り上げるだけの餘裕をもたないが、制度に關してはなお重要な文書が少なからず存在していて、今後の更なる研究が待たれる。

童蒙の識字教材として、急就篇や千字文の出ていることは上にも觸れたが、唐代西州の學生が五言詩を用いて習書している斷簡(二〇〇六年徵集吐魯番出土文獻の六五)などは確かに珍しいものといえよう。<sup>⑱</sup>

暦日や占書など民間信仰に關しても興味深い文獻が見える。一例を挙げれば、本書で「易雜占」と擬題される文獻は八八行を存する比較的完好な寫本(洋海一號墓出土)であるが、高昌國時代の占卜の實相を

窺う資料としての価値は高い。<sup>50)</sup>  
 もちろん本書に収録される文書は以上に  
 盡きるものではなく、まだまだ多くの興味  
 深い材料が含まれているが、いま紙幅の關  
 係でそれらに觸れることの出来ないのは殘  
 念である。

さて「新獲」文書の整理に当たっては、  
 本書の公刊に至るまでに、日本でいう共同  
 研究方式が採用され、三人の主編の下、多  
 くの若い研究者が整理小組に参加し、各自  
 の關心と専門に基づいて分擔して研究に當  
 たった。編纂に従った人員として、張永兵、  
 張銘心、朱玉麒、湯士華、史睿、雷聞、余  
 欣、姚崇新、畢波、游自勇、王媛媛、裴成  
 國、陳昊、文欣、丁俊、合計十五人の名が  
 挙げられている。二〇〇五年以來、整理小  
 組では定期的に會讀の形式で録文の作製を  
 行い、逐次討論會を開催して誤りの訂正を  
 行った。その過程で同時に、小組のメン  
 バーにより多くの論文が執筆された。そう  
 いう事情で、本書に収録された文書のうち  
 最も価値が高いと思われるものは、本書の  
 出版に先行してすでに關連論文が公刊され  
 ている場合がほとんどである。したがって  
 もし本書の内容を全面的に紹介批評しよう

とすれば、これらの既刊論文すべてにわた  
 って詳しく検討しなければならないが、今  
 それだけの準備がない。個別の問題に關し  
 て更に批評的態度をもって臨まんとする向  
 きは、是非各文書の解説に引證されている  
 論考を熟讀玩味されることを推稱する。

## 註

- ① この雑誌は内部資料の扱いであったが、  
 二〇〇八年から公開出版物となった。
- ② 旅順博物館・龍谷大學共編『旅順博物館  
 藏新疆出土漢文佛經選釋』（旅順博物館藏  
 トルファン出土漢文佛典斷片選影）法藏  
 館、二〇〇六年三月刊。
- ③ レーゲルはこの遺跡をやや訛りながらド  
 イツ語式にKaragudscha（カラホージヤ）  
 と轉寫している。次の注の文献を参照。
- ④ A. Regel, *Meine Expedition nach Turfan  
 1879. Petermanns Geographische Mit-  
 teilungen*, 27 Bd., 1881, S.380-394; E. De-  
 lmar Morgan, *Dr. Regel's Expedition from  
 Kuldja to Turfan in 1879-80, Proceedings of  
 the Royal Geographical Society*, Vol.3, No.6,  
 1881, pp.340-352; I.F. Popova (ed.), *Rus-  
 sian Expeditions to Central Asia at the Turn  
 of the 20th Century*, St.Petersburg, 2009,
- ⑤ А.Н.Рягоза, *Соглиньские фрагменты  
 Центрально-Азиатского собрания Ин-  
 ститута Востоковедения*, Москва, 1980,  
 С.76.
- ⑥ Association internationale pour l'explora-  
 tion historique, archéologique, linguistique et  
 ethnographique de l'Asie Centrale et de  
 l'Extrême Orient（中央アジア及び極東の  
 歴史、考古、言語、民族學的調査のための  
 國際連盟）。
- ⑦ 同じくとは第二回探險の橋瑞超の場合も  
 同様で、その旅行記「中亞探險」に、「私  
 の始めてトルファンに参りました頃（一九  
 〇八年）には、總てこれらの人々（ロシア  
 のクレメンツ及びドイツ隊を指す——筆  
 者）が荒らし廻った後で、私は發掘上大い  
 に不利の立場に立ったのですが、それでも  
 なお私は私だけの満足すべき多少の發掘物  
 を得たのです」と書いている（中公文庫版  
 一九八九年、二〇九—二一〇頁）。オルデ



ンブルグ隊も同じ状況に直面せざるを得なかったのである。後年シチエルバツコイ(Ф.И.Шлепачков)がオルデンブルグ隊に關して述べた語を参照(Popova 上掲書三三頁に引く)。

- ⑧ *Sinonimprähäsa* (Cypria zonororo grecka), Bibliotheca Buddhica. XVII, St. Petersburg, 1913.

- ⑨ スタインのトルファンにおける活動の詳細は以下に見える: Aurel Stein, *Innermost Asia. Detailed Report of Exploration in Central Asia, Kansu and Eastern Iran*, Vol. II, pp. 587-718. スタイン第三回探險の所獲文獻のうち、漢文のものはフランスのマスベロ(Henri Maspero)に委ねられ、後に *Les documents chinois de la troisième expedition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale* (London, 1953)として出版された。現在では、同じ文獻を扱ったより新しい業績である陳國燦『斯坦因所獲吐魯番文書研究』(武漢大學出版社、一九九五年)も必見。さらに近年これら文獻を収録した圖録、沙知・吳芳思編『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文獻(非佛經部分)』二冊(上海辭書出版社、二〇〇五年)も出版された。
- ⑩ 黃文弼は一九三二年に『高昌磚集』を、一九三三年に『高昌陶集』を刊行したが、

全體の調査報告はようやく戦後になって、『吐魯番考古記』(考古學特刊第三號、中國科學院、一九五四年)として公刊された。本書には以下の日本語譯が存在する。土居淑子譯『トルファン考古記』(黃文弼著作集第二卷)、恆文社、一九九四年。また後年、子息黃烈氏の編になる論文集『黃文弼歷史考古論集』(文物出版社、一九八九年)が出版され、その第二編(九七—二〇一頁)がトルファン關連の論考に充てられているほか、當時の調査を記した『黃文弼蒙新考察日記』(一九二七—一九三〇)(文物出版社、一九九〇年)も同じく黃烈氏により整理出版されている。

- ⑪ 『吐魯番出土文書』第一冊(文物出版社、一九八一年)「前言」。ただしすぐ後の墓葬から文書が出たわけではない。
- ⑫ 『吐魯番出土文書』壹・肆、文物出版社、一九九二—一九九六年。
- ⑬ 柳洪亮『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社、一九九七年、その第一編(一一—一三一頁)。ちなみに本書の第二編は「出土簡報」第三編は「專題研究」で、柳氏の關連論文を収録する。
- ⑭ 『吐魯番新出摩尼教文獻研究』文物出版社、二〇〇〇年。
- ⑮ 榮新江「シルクロードの新出土文書——

吐魯番新出土文書の整理と研究」『東洋學報』第八九卷第二號(二〇〇七年九月)五九—七七頁。地圖は譯者西村陽子氏の作製に係る。

- ⑯ 『考古』二〇〇六年第二期はこれらの發掘に關する特集號と言ってもよく、以下の簡報が掲載されている。

⑰ 「新疆吐魯番地區阿斯塔那古墓群西區400號墓」  
「新疆吐魯番地區交河故城溝西墓地康氏家族墓」  
「新疆吐魯番地區木納爾墓地的發掘」  
「新疆吐魯番地區巴達木墓地發掘簡報」

- ⑱ Grünwedel, Albert, *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903*, vol. 1, p. 51, fig. 45, "Der sogenannte "Ara-san" in Asiana."
- ⑳ 渡邊哲信「西域旅行日記」『新西域記』上卷、有光社、一九三七年、三六九頁。

- ㉑ 孟憲實「吐魯番新發現的《唐龍朔二年西州高昌縣思恩寺僧籍》」『文物』二〇〇七年第二期。

- ㉒ より詳しくは Yoshida Yuuka, *Sogdian Fragments Discovered from the Graveyard of Badam, Historical and Philological Studies of China's Western Regions*, No. 1, 2007,

pp.45-53.

- ⑲ 『西域歴史語言研究所集刊』第一輯（二〇〇七、一三―四四頁）。これには西村陽子氏による日本語譯がある。「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」『内陸アジア言語の研究』二三號、一五一―一八五頁。
- ⑳ ごく小断片だが、ソグド語文書は巴達木二四七號墓からも出ている。この墓葬は康氏のもので、こちらはソグド人が用いたと考えられる。近くの二四五號墓からは麴氏高昌國延壽九年（六三二）の隨葬衣物疏が出ていて、二四七號墓もほぼこれと同時代であろう。
- ㉑ 榮新江「闐氏高昌王國與柔然、西域的關係」『歴史研究』二〇〇七年第二期、同縣城鎮」『敦煌吐魯番研究』第一〇卷（二〇〇七年）。
- ㉒ 雷聞「吐魯番新出土唐開元禮部式殘卷考釋」『文物』二〇〇七年第二期。
- ㉓ 李肖、朱玉麒「新出吐魯番文獻中的古詩習字殘片」『文物』二〇〇七年第一期。
- ㉔ 余欣、陳昊「吐魯番洋海出土高昌早期寫本《易雜占》考釋」『敦煌吐魯番研究』第一〇卷（二〇〇七年）。
- 二〇〇八年四月 北京 中華書局  
B4版 二二三―二四十一―三三八―九十四―八頁  
一八〇〇元